

平成 22 年 6 月 11 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18520560
 研究課題名（和文）アメリカ合衆国における優生学と人種秩序の歴史的考察
 —異人種間結婚禁止法と断種法
 研究課題名（英文）Historical Research on the Eugenics movement and the Racial Order
 in the United States: Anti-Miscegenation Laws and Sterilization Laws
 研究代表者
 貴堂 嘉之（KIDO YOSHIYUKI）
 一橋大学・大学院社会学研究科・准教授
 研究者番号：70262095

研究成果の概要（和文）：

本研究は、20世紀前半の革新主義期に展開したアメリカ優生学運動を、同時代における人種秩序の形成との関係のなかで考察したものである。チャールズ・ダベンポートを中心に人種改良・人間改良を目指した研究施設や主要人物の整理とともに、全米各州で制定された断種法や異人種間結婚禁止法の制定過程を検証し、国際的な優生学運動にも影響を与えたアメリカ優生学運動の歴史を詳細に検討することができた。

研究成果の概要（英文）：

This research has surveyed the American Eugenics movement in which Charles Davenport was the pivotal leader in the first half of the twentieth century. It included the analysis of the nativist eugenic ideology, immigration restriction, eugenic sterilization legislation, and anti-miscegenation laws, which had great influence on the international eugenics movements.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,100,000	0	1,100,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,400,000	690,000	4,090,000

研究分野：西洋史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：人種・優生学・断種・ジェンダー・セクシュアリティ・国民化・公衆衛生・混血

1. 研究開始当初の背景

I. 研究代表者の貴堂は、本研究課題開始前の5年間に、アメリカ合衆国の国民統合の過程での人種秩序形成を問い直す作業、具体的

には、政治的・社会的構築物としてのホワイトネス（白人性）をめぐる市民の法的・政治的・社会的境界上での包摂と排除の政治を検証する作業を、4つの共同研究を通じて実施

してきた。そもそもの研究関心の原点には、啓蒙主義的な自由・平等の理念からなるアメリカのシビック・ナショナリズムは、南部での奴隷制や西部のアジア系排斥、東部の非wasp系移民排斥などの人種的ナショナリズム、ネイティヴィズムとどのように折り合いをつけながら、政治・社会統合がなされてきたのかという点にあった。歴史研究者のみならず内外の人類学者、社会学者らとともに、「人種」概念そのものの再解釈に向けた共同研究を行うなかで、「アメリカ合衆国にとっての近代と人種」という問題関心を持つに至った。この共同研究の成果は、竹沢編『人種概念の普遍性を問うー西洋的パラダイムを超えて』(人文書院、2005)に結実し、内外の人種研究に大いに刺激を与えることとなった。また、アメリカ史分野の専門家による時代横断的な「日常のなかの国民意識」を対象とする歴史共同研究を行い、国民意識に潜む人種意識・エスニック意識・ジェンダー規範などについて、より理解を深めることができた。この成果は、2006年3月に『歴史のなかの「アメリカ」』(彩流社)として公刊されたが、高度に実証的な歴史研究として当該分野の研究に大きく寄与するものとなったと自負している。また、個人研究としてもアメリカ合衆国における国民化と人種化の相互関連に関する理論的な整理を行うことができた。ここでは、南北戦争後の再建期という特殊な時代性、つまり、国民の境界の流動期としての特徴を検証し、近年の記憶論分野の先行研究をも渉猟し、総合することができた。また、文字資料のみならず、当時の発行された絵入り新聞など視覚史料の分析をも試み、Harper's Weekly誌で活躍したトマス・ナストの政治風刺漫画をアメリカ・ナショナリズム論の系譜に位置づける作業が完成した。さらに、アメリカの第一線のアジア系アメリカ人研究者と共同研究する機会を得て、トランスナショナル、ディアスポラ、ハイブリディティなど、国民とそれ以外の他者とを差異化するもう一つの理論枠組み(ポストコロニアリズム、カルチュラル・スタディーズなど)を批判的に考察することができた。また、本共同研究の最終年度に開催された国際シンポジウムでは、アジア系アメリカ人の越境・雑種性の問題を、19世紀に全米38州で制定された異人種間結婚禁止法が白人・黒人関係のみならず、白人・アジア系関係をも視野に入れた人種的不安をもとにしてきたことを検証し、ペーパーを作成した。これは、本科研で研究課題とした異人種間結婚や断種法といったアメリカ合衆国の出生や結婚の場に公権力が介入し、監視しようとした大きな歴史のうねりを歴史化しようとする問題と直接、つながっている。

2. 研究の目的

近年のアメリカ合衆国史では、社会的構築物として「人種」概念の検証作業がすすんだことで、これまで社会経済史的観点から貧困や人種差別などを分析し、積み上げられてきたマイノリティ研究の動向が大きく変貌してきている。とりわけD.ローディガーが旧来のマルクス主義的労働史を批判的に乗り越える試みとして、労働者の階級意識の中に潜む人種意識の重要性を指摘し、黒人奴隷と自らとを差別化する主体的なホワイトネスの概念を鍵概念として提示して以降は、アメリカ合衆国の市民権概念(法的な市民概念だけではなく、社会的に定義される市民の境界に関心)の見直しがすすみ、市民であることを自明視した法制度的視角は見直しを迫られることとなり、アメリカ合衆国の国民統合、ナショナリズム、アメリカニズムの研究は新たな段階に入ることとなった。

これまでのアメリカニズム研究では、啓蒙思想に彩られた理念国家としての国家像と、多様な移民をアメリカ社会に溶かし入れて同化することで、均質的な国民を作り出す「移民国家アメリカ」としての自画像が、歴史研究そのものの枠組みを予定調和的に規定していたといつてよい。だが、上述の新しい研究視角は、この作られた「国民の物語」を解体し、そのアメリカ例外主義的な歴史像を塗り替えようとしている。本研究の大きな目的の一つは、こうした特殊な例外的なものとして性格付けられてきたアメリカの歴史像を、ヨーロッパ近代あるいは、世界史的な近代と共通する「共時的近代」なるものをアメリカの歴史の中に見出していく作業を通じて、アメリカ史像を相対化することにある。

そこで本課題が焦点を当てるのは、近代ヨーロッパのみならず近代アジアでも隆盛した優生思想、優生学の実践である。ゴルトンが創始した優生学(1883)は、各国で支配民族による排他的民族主義を刺激し、よき血筋を増やすため健康運動や出生率を上げるための運動などを引き起こしたが、他方、悪質の遺伝形質を人工的に淘汰することを目論む産児制限、隔離、断種などマイノリティ、障害者を排除する実践をも引き起こした。つまり、この優生思想は近代社会に通底する一つの「理想」形を作り出す社会の衝動を生み出すと同時に、ナチス政権下でのホロコーストが端的に示すように、人類に大きな負の遺産をも残す結果となった。

本課題では、これまで革新主義期の重要な歴史事象でありながら、その歴史的意義を軽視されてきたアメリカ合衆国における優生学的実践の社会史的な実証的な検証作業を行う。近年では、ナチ優生学との親和的性格が明らかになりつつあるアメリカの優生学は、全米27州で断種法が制定されるなど、

同時期、全米に旋風を巻き起こした。だが、これまではこの優生思想の影響を、たとえば革新主義運動や福祉国家思想の文脈のなかに位置づける作業が等閑視されてきており、また、一国史的枠組みのなかで論じられてきた南部黒人に対する人種隔離制度の成立や、ヨーロッパ系新移民やアジア系移民への移民排斥（ネイティヴィズム）運動との関係についても研究が深化していない。

以上のような問題意識に基づき、本科研プロジェクトでは、近代における国民管理の技法が生み出される19世紀後半から20世紀前半の時期において、アメリカで立法化された異人種間結婚禁止法（全米38州で制定）と断種法の各州での法制化の過程を具体的に検証する作業を通じて、人々の婚姻と生殖という日常空間に国家権力が介入して、これをいかに監視しようとしたのか、これがアメリカ合衆国の人種秩序の形成にいかなる影響を与えたのかを総合的に検証することを目指した。

3. 研究の方法

本科研プロジェクトでは、4年間のうちに東部・南部・西部と各地域ごとに、具体的な課題テーマを設定し、各州レベルでの異人種間結婚禁止法と断種法の立法過程とその法運用の実態を解明する方法をとることを目指した。また、これまでに個別研究が少ない、アメリカ優生学協会（American Eugenics Society）などの団体や主要な優生学者に関する調査を実施し、今後のアメリカ優生学運動研究の基礎作業を完成させることを目指した。

だが、2006年度はアメリカ西部、2007年度は南部、2008年度は東部を重点的に検証し、2009年度に総括する計画を当初立てたが、当初の予想に反して、地域別に特徴を浮き彫りにすることは資料の性格上むずかしかったため、実際には連邦レベルの法律の制定過程を重点的に検証し、また主要な優生学関連施設などを詳細に検討し、そこで実際に研究に従事した優生学者やソーシャルワーカー、医者らに焦点をあてて、研究を遂行する方法をとって、研究を実施した。

4. 研究成果

(1) 2006年度

4ヵ年計画の初年度にあたる2006度は、優生学運動研究にとって象徴的な存在であるポーランドのアウトシュビッツ・ビルケナウ強制収容所などの史跡を訪問することから始めた。ポーランド、ドイツ、イギリスの公文書館で関連資料の収集につとめ、20世紀前半に、アメリカ合衆国の優生学者やその影響を強く受けた政治家が、ドイツの政治家や科学者といかなる接点をもっていたのかを調査

し、またドイツにおける優生立法、遺伝、断種、結婚に関わる法律と、アメリカにおける異人種間結婚禁止法、断種法などを比較し、その相互の連関を検証した。

(2) 2007年度

二年目の2007度には、アメリカ合衆国の三都市（パークレー、ロサンゼルス、ニューヨーク）の図書館、文書館をめぐる、合衆国の異人種間混交に関わる法制度分析の基礎史料や優生学運動に関する一次史料を集めた。これらの調査をもとに、論文「移民国家アメリカの「国民」管理の技法と「生・権力」—人種主義と優生学—」を発表し、アメリカ合衆国の革新主義期の社会運動や社会政策を、「生—権力」の観点から整理し、優生学的知を柱とする運動として歴史的に再解釈した。

(3) 2008年度

三年目にあたる2008年度にも、アメリカ合衆国の東海岸での調査を実施し、断種法やアメリカ優生学運動の拠点であるコールド・スプリング・ハーバーに関する史料を重点的に集めた。歴史学研究会や国際シンポジウムでもこの優生学や人種秩序に関する研究成果を発表する機会をえた。

以上の3年間の研究により、全米各州の優生学運動の展開過程、異人種間結婚禁止法や断種法の立法過程などについての理解が深まってきており、アメリカ史の人種論やジェンダー史にも新たな知見を付け加えることができた。

(4) 2009年度

最終年度にあたる2009年度は、人種関連やジェンダー・セクシュアリティ関連の専門書の収集に引き続き努めるとともに、3月には、優生学関連の個人ファイルが多く所蔵されているフィラデルフィアのアメリカ哲学協会において、とくにチャールズ・ダベンポートの個人ファイルを集中的に調査した。これにより、アメリカ国内のみならずイギリス・ドイツ・日本の優生学者とのトランスナショナルな関係や、産児調節運動など他の組織・団体との関係についても整理でき、大きな成果をうることができた。日本においては、基本史料や文献リストもない段階で開始したプロジェクトとしては、この4年間で組織レベル・個人レベルでの史資料をかなりの程度集めることができたので、研究上の意義は大いにあったと考える。これらの研究成果は、本年度刊行された『アメリカ史研究入門』や『アメリカ・ジェンダー史研究入門』などで、アメリカの人種・ジェンダーなどについて執筆するにあたって大いに役立った。とくに、後者では「優生学」のコラムを担当し、最新

の知見を紹介することができた。また、『人種の表象と社会的リアリティ』の第一章に掲載した「アメリカ合衆国における「人種混交」幻想—セクシュアリティがつくる「人種」—では、同時代の異人種間結婚禁止法について分析し、アメリカにおける「人種混交」幻想について検証することができた。これにより優生学運動の隆盛の背景にある人種秩序をめぐる時代背景についても、考察することができた点は大きかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①貴堂嘉之 「「人種化」の近代とアメリカ合衆国—ソシアビリテの交錯と「国民」の境界—」『歴史学研究』 通巻 846 号, 2008, 90-99 頁、査読なし

② 貴堂嘉之 “Anti-miscegenation and Asian Americans” Daizaburo Yui (ed.) *The World of Transnational Asian Americans*(アメリカ太平洋研究) 6, Center for Pacific and American Studies, University of Tokyo, 2006, 81-99, 査読なし

[学会発表] (計 4 件)

①貴堂嘉之 国際シンポジウム「環太平洋地域における日本人の国際移動」コメンテーター (立命館大学「日本人の国際移動研究会」・立命館大学国際言語文化研究所)(会場: 立命館大学、2009 年 10 月 11 日)(招待講演)

② 貴堂嘉之 The 12th Kyoto University International Symposium: Transforming Racial Images -Analyses of Representations, 2008.12.6, 京都大学百周年時計台記念館百周年記念ホール

③貴堂嘉之 「人種化の近代」とアメリカ合衆国—ソシアビリテの交錯と「国民」の境界—, 歴史学研究会 近代史部会「分類のポリテクス—近代的「人種」の再検討」, 2008.5.18, 早稲田大学

④貴堂嘉之 「ホロコーストのなかの「アメリカ」—アメリカ優生学運動の歴史—」, 日本アメリカ学会・年次大会「歴史と記憶の制度化をめぐる」, 2007.6.10, 立教大学

[図書] (計 7 件)

①貴堂嘉之 コラム「優生学」、有賀夏紀・小檜山ルイ編『アメリカ・ジェンダー史研究入門』(青木書店、2010) 214-218 頁.

②貴堂嘉之 「歴史のなかの人種・エスニシティ・階級」 有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎編『アメリカ史研究入門』(山川出版社、2009)、169-189 頁

③貴堂嘉之 「アメリカ合衆国における『人種混交』幻想—セクシュアリティがつくる『人種』」 竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』(岩波書店、2009)、28-56 頁

④貴堂嘉之 古矢旬・山田史郎編『権力と暴力』(共著)、ミネルヴァ書房、2007。(分担部分: 6 章「移民国家アメリカの「国民」管理の技法と「生—権力」—人種主義と優生学—, 133-154 頁)

⑤貴堂嘉之 樋口映美・中條献編『歴史のなかの「アメリカ」—国民化をめぐる語りと創造』(共著)、彩流社、2006。(分担部分: 第 1 章:「血染めのシャツ」と人種平等の理念—共和党急進派と戦後ジャーナリズム、附論: 日米のナショナリズム・国民意識に関する研究史, 21-42、370-394 頁, 共著者: 附論は戸邊秀明と共著)

⑥貴堂嘉之 アメリカ学会編『原典アメリカ史 社会史史料集』(共著)、岩波書店、2006。(分担部分: 第 14 章 「国民」の境界をめぐる—国民化の「暴力」、189-200 頁)

⑦貴堂嘉之 「ホワイトネス研究の方法と国民国家論—ネイションの記憶・人種の表象」 森村敏己編『視覚表象と集合的記憶—歴史・現在・戦争』(旬報社、2006)、171-201 頁.

[その他]

ホームページ

<http://www.soc.hit-u.ac.jp/~kido/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

貴堂 嘉之 (KIDO YOSHIYUKI)

一橋大学・大学院社会学研究科・准教授
研究者番号: 70262095

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし